

るが、良性上皮下では悪性上皮侵入時に形成されるような特異な突破像は決して起らない。

42. 癌組織の Co^{60} 感受性に及ぼす諸種物質の影響に関する実験的研究

(大阪市大) 藤森速水, 山田文夫
寺村定雄, 坂口治男, 武田正二

余等は昨年の本總會に於て、 Co^{60} の制癌作用に関する実験的研究結果を発表したが、今回はエールリッヒ腹水癌移植後10日目の腹水 0.1ccを體重約15~20gの雄性雑系マウスの側背部皮下に接種し、その移植癌に對し、 Co^{60} 針近接照射と性ホルモンとの併用、或は重金類との併用、或は制癌剤との併用を行い、癌組織の Co^{60} 感受性がこれら物質の併用によつて如何なる影響を蒙るかを觀察した。

實驗方法：先ず制癌剤・ Co^{60} 併用實驗では各種制癌剤を大量（250mg/kg以上）、中等量（150mg/kg）、少量（50mg/kg以下）の3群に分け、移植當日より15日間連續腹腔内に注射し、又同時に Co^{60} 針を腫瘍に密着させ線量26r照射し、制癌剤・ Co^{60} 併用群、 Co^{60} 單獨照射群、制癌剤單獨投與群、對照群の4群に分けて觀察した。

次にホルモン・ Co^{60} 併用實驗では、腫瘍發生確認後 Co^{60} 針20mc表面量1666r照射後、テストステロン・プロピオネート（T.p.と略）125mg/kg、エストラジオール・ベンツァート（E.b.と略）25mg/kg、プロゲステロン（P）50mg/kgを背部皮下に隔日3回連續注射した。この實驗も Co^{60} 單獨照射群、 Co^{60} ・T.p.併用群、 Co^{60} ・E.b.併用群、 Co^{60} ・P併用群、各ホルモン單獨注射群、對照群の8群に分けて觀察した。次に重金類製劑 Co^{60} 併用實驗では、移植後3日目前後から1週間に3回の割合で連續5回に互つて、アルゼノベンゾールソーダ、或は鹽基性トリクロールブチルマロン酸蒼鉛、或はアウロチオグルコース等を腫瘍内に直接注射し、 Co^{60} 針線量約1117rを全身照射した。本實驗に於ても重金類製劑注射後 Co^{60} 照射群、 Co^{60} 照射後重金類製劑注射群、 Co^{60} 單獨照射群、重金類製劑單獨注射群、對照群の5群に分けて比較觀察した。

實驗成績：生命延長に就ては、制癌剤投與群中、單獨投與群は Co^{60} > A.Z.M. > ギルコマイシン > アザンで Co^{60} 製癌剤併用群は單獨群より10日以上延長を示した。ホルモン投與群ではT.p.單獨群 > 對照群 > T.p.・ Co^{60} 併用群、對照群 > Co^{60} 單獨群 > P單獨群 $\approx$ Co^{60} ・P併用群、對照群 > Co^{60} 照射群 > E.b.注射群 > E.b.・ Co^{60} 併用群の關係を示した。重金類製劑實驗では、 Co^{60} 單獨群

が最も長い生存を示した。

體重變化に就ては、制癌剤では體重減少の度合は單獨投與群は Co^{60} < A.Z.M. < ギルコマイシン < アザンで、併用群は投與後7日目より體重増加の傾向を示しホルモン投與群ではT.p.は増加的にE.b.は寧ろ減少的に作用し、重金類製劑では、重金類製劑注射後 Co^{60} 照射群は一般に減少の傾向を示したが、他群は余り一方向に増減を示すことは少なかった。

腫瘍の發育抑制制度に關しては、制癌剤では單獨群は、 Co^{60} > ギルコマイシン > アザン > A.Z.M.で併用群は中等量以下の投與群は單獨群及び對照群に比し大である。猶ナイトロミン投與群に就ては目下検討中である。T.p.は腫瘍減少的に作用し、重金類製劑注射 Co^{60} 照射群は他群より遙かに強い腫瘍發育抑制制度を示し、而も Co^{60} 照射後重金類製劑注射群より強度の抑制を示した事實は前者に於て腫瘍組織の Co^{60} 感受性が重金類により直接影響された以外に二次線に依る影響をも首肯せしめるに足る。

43. 子宮頸癌 C.P.L.分類と間質反應、特に好酸球出現態度に就て

(神戸掖濟會) 松村 博良

1950年九大今井教授は癌腫發育先端部に於ける癌實質對間質關係及び脈管内蔓延狀況と其の程度からC.P.L.の3型に分類し、其の後1952年新大赤崎教授は摘出子宮頸癌のC.P.L.分類と其の豫後に就て報告された。

演者は子宮頸癌患者の摘出標本に依り其のC.P.L.分類に従つて間質反應特に局所好酸球の出現態度に就き檢索した成績に就いて報告する。

實驗材料 神戸掖濟會病院産婦人科、東京醫科大學産婦人科教室、及び日赤渋谷産院に於ける最近10年間の子宮頸癌摘出標本80例に就き、癌魂中心を通り、且つ癌腫の邊緣及び其の周邊組織を充分含めた全割標本を作り、更に之を左右に2分し、H・E及びV・G染色をし以下の如く檢索した。

1) 組織學的分類、扁平上皮癌群76例、腺癌群4例C.P.L.分類に分けると、C型56例、P型5例、及びL型19例で、各型に輕度の他の型を含むもの合計28例あつた。其の内簇出胞巢部に好酸球出現したものC型40例、P型4例、L型15例である。

2) 好酸球の出現する程度の判定規準は檢鏡下(90×油浸)1視野3コ迄(+), 6コ迄(++), 9コ迄(+++), それ以上を(++++)とし、視野4つの平均値を以て出現程度を決定し、同一標本にても特に異つた所見の者は2コ以上

計上した。胞巢内に好酸球の突入するものをE₁とし、胞巢周縁に接しているものをE₂、胞巢に接する間質反應内に出現するものE₃、特に血管周縁に出現するものE₄とした。C.P.L.分類に従い簇出部に於ける局所好酸球出現状況を各型の陽性群につきE₁, E₂, E₃, E₄に区分して見ると、C型:E₁ 19, E₂ 18, E₃ 68, E₄ 4計109, P型:E₁ 2, E₂ 1, E₃ 4計7, L型:E₁ 2, E₂ 4, E₃ 10計16, 總計132である。即ち簇出先端部では簇出胞巢周縁に出現率高く、特にC型に於て好酸球出現程度が強い。

3) 間質は吉田教授の述べる如く固有間質と偶然間質に分けられる。勿論腫瘍の間質反應として兩者の鑑別に困難なときがあるが、今此の問題に觸れずに各々の場に於ける好酸球の出現程度とC.P.L.分類に就て見ると癌腫周縁間質部に於てはC型に多く(例數省略)、胞巢間隙に於ける偶然間質部でもC型の方が著明である(例數省略)。

4) 發育先端部簇出胞巢の腫瘍細胞の進行度と好酸球出現状況をC.P.L.分類に依つて見ると、C型に於ては進行型の場合に好酸球の出現が著明で、静止型、退行型の場合は何れも出現程度は少い。又進行型の胞巢内には好酸球突入するものが多く認められる。P型、及びL型の兩者は全く少い(例數省略)。勿論P型に於て腫瘍細胞の退行型には全く無く静止型のみに認められた。

44. 子宮頸癌の病理と豫後

(岡大) 秋本若二, 長瀬 勇, 浮田美勝
勝矢 修, 池田喬滋, 林 幸三

1) 試験切除切片所見と豫後(長瀬)

C.P.L.組織分類(今井)は頸癌豫後と密接なる関連を有し、一般の注目を浴びているが、小なる診査切除片には適用しがたい。長瀬は昭和16~23年間の放射療法例517例に就き検討を行い、豫後と密接なる関係を有する組織分類を企て次の如き結論に達した。即ち診査切除片に於ける癌實質と間質との関係より、今井氏のイデーを参考とし、次の3型に分類した。

I型…殆んど無簇出で、癌實質と間質との境界部がすべて鮮明なもの。

II型…癌實質、間質境界部に於て、簇出が軽度及び中等度で、境界は一般に不鮮明に見え、癌實質が既存間質内に進出して行く感じを與えるもの。

III型…II型の像を標本内の多數の箇所且つ極めて強度認めるもの。

本分類各型に於ける5年治癒率はI型61.0% (75/123), II型25.6% (87/340), III型1.9% (1/54)で、各型間に明らかな治癒率の差を認めた。

2) 放射療法患者の腔内容 T.P.T. 陽性細胞と豫後(浮田)

一定量の腔内容中のT.P.T.陽性細胞を放射療法中毎日検査し、その消長を觀察した。治療初期のものに比しレ線第12回(3600r)終了前後に於ける細胞数が3倍以上の増加を示すものをA群、減少又は多少増加するものをB群として100例に就て、治療後の経過との関係を見ると、A群に於てはB群に比して経過良好例が明らかに多い。

3) 組織的進行期と豫後(勝矢)

術後滿5年以上を経過した岡林式子宮頸癌剔出標本55例に就て、組織的進行期と豫後との関係を調査すると、進行期の進むに従い豫後が不良となる。次に他の50例に就て子宮提帯を前部・中部・後部別個に検査すると、臨床第II期31例中3例に中部のみならず前部に癌組織を證明した。後部は全例に陰性であつた。

4) 尿素クリアランス値(池田)

手術療法群36例の入退院時尿素クリアランス値は92.9%, 87.3%で、退院時稍と低下の傾向が見られ、放射療法群28例では80.4%, 83.4%と稍と上昇しているが、いずれも有意差は見られない。退院後定期検診時のものは経過良好例では手術療法群は次第に上昇し、退院後6カ月で健常人値に恢復する。放射療法群では退院後6カ月より退院時値より僅かに上昇する。経過不良例では良好例に比し腎機能が低下している様に思われる。

5) 足高氏妊娠異常尿反應(林)

治療後定期検診時に於ける成績は、経過良好群46.2%不良群88.3%, 再發疑わしきもの80.6%の陽性率を示し、良好群が有意に低率である。尚検診時毎回陰性を示すものの93.1%は経過良好であるが、連結陽性を示すものの44.1%は経過不良であつた。従つて本反應連續陽性を持続するものでは、その経過に對し深甚なる注意を要する。

45. 子宮頸癌の占居部位と組織形態、特に“不可視癌”に就て

(慈大) 細川 勉, 佐藤 裕
八島元次, 西田孟史, 樋口儀市

吾々は第7回總會に於て、早期癌と稱し得るような子宮頸癌では意外に癌巢が頸管側を占居していることを報告したが、今回は昭和28年度以降手術に依り剔出された